2013.5.8.

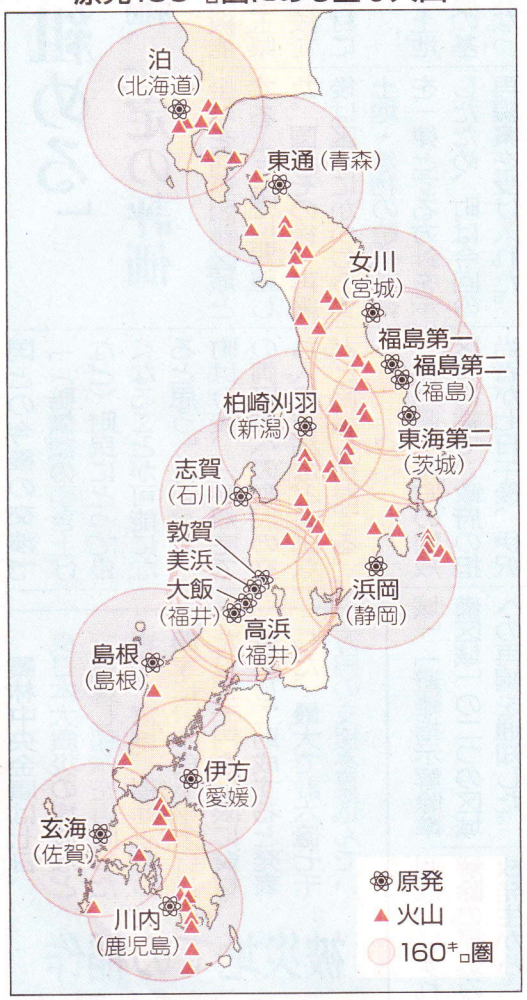
噴火の危険度 難しい予知

原発新基準に対策義務化

七月に施行される原発の新しい基準で、電力会社は百六十キロ圏の火山活動の影響を想定することが義務づけられる。地震国・日本は世界有数の火山国でもあり、どの原発も圏内に火山がある。大規模噴火の危険に直面する場合、廃炉を迫られる可能性もあるが、専門家は「危険性をどう判断するか難しい」と指摘する。

（永山陽平）

原発160キロ圏にある主な火山



全基、160キロ圏内に火山

日本には活火山が百十あり、全世界の約7%を占める。

火砕流が原発に達すれば、冷却設備などが破壊され、重大事故につながる恐れがある。このため、原子力規制委員会は新基準で、火山のチェックを義務づけた。

国内最大級とされる九万年前の阿蘇山（熊本県）の巨大噴火を想定し、調べる火山の範囲は火砕流が及んだ百六十キロ圏に設定。その結果、全ての原発の同圏内に一つは火山があり、多い所では十以上の火山がある。

今後、重要になるのは、どの火山が、どのくらい危ないのかを見定めることだ。

ただ、火山噴火予知連絡会の藤井敏嗣会長（東京大名誉教授）は「原発に影響を及ぼす大規模噴火の予知はできない」と、相当な難題だと言う。

噴火の予兆そのものは地震計などで数日～数時間前にキャッチできる。だが、大規模な噴火に発展するかどうかまで言い当てるのが難しいという。

国内で最も新しい大規模噴火は七千三百年前。火山活動は数千～数十万年単位で分析されるのに対し、原発の運転期間は数十年。時間軸が違いすぎ、専門家でも正確なリスク判定は容易ではない。

どの火山が危険かを判定するのも難しい。いま噴煙を上げている火山が危ないとは一概に言えず、静岡大の小山真人教授は「眠っている（火山噴火でできた大型の窪地がある）カルデラに注意がいる」と語る。小山教授は大規模噴火の可能性がある火山として、鹿児島県の海底にある姶良（あいら）カルデラや北海道の有珠山などを挙げる。

火砕流が届かなくても、火山灰は広範囲に飛ぶ。九万年前の阿蘇山噴火では、北海道で十センチも積もった。

産業技術総合研究所の山元孝広氏（火山学）は「火山灰対策は全ての原発ですべきだ」と指摘。日本電気協会の担当者は、火山灰が送電網に積もって電線を傷めることや、灰がフィルターをつまらせ非常用ディーゼル発電機を動かせなくする危険性を挙げ、対策強化の必要性を訴えた。